

健康メモ

「治る」という言葉について

広島市東区医師会理事
広島鉄道病院皮膚科部長 堀内 賢二

「先生、私の病気は治るのでしょいか？」と、今日も外来診察室で患者さんが質問される。臨床医ならば誰しも一度は経験することである。



私が専門としている皮膚病には、「治る」つまり「症状が完治し、再発しない」病気は非常に少ない。厳密に言うと、手術で完全摘出した皮膚良性腫瘍以外は「治る」皮膚病はないと言っても過言ではない。従っ

て私は、めったに「治る」という言葉は使わない。

ありふれた病気、例えば水虫（足白癬）にしても原因は白癬菌（カビ）なので、足を適当な温度と湿度の環境下におくと再発する。（日本は高温多湿期である梅雨があるので、やむをえないと思われる。）また、虫さされにしても（今年の夏は、四年ぶりにドクガ皮膚炎が大流行した、半袖スカート、半ズボンでいると、何度でもやられてしまう。）

皮膚病も完治できないと説明している。そして、基礎疾患と同じく皮膚病とも「気長に付き合う」よう話している。

その他、飲酒や香辛料摂取は「皮膚にかゆみを生じる」ことが知られている。治りにくい湿疹、皮膚炎患者さんに飲酒歴を質問すると、八割以上の方からビール大瓶毎日一本以上（又は日本酒毎日一合以上）という回答が返ってくる。私は「火事と消火」に例えて、禁酒（火事の原因を断ち切る）しないと皮膚科医がどんなにがんばって治療（消火）しても、皮膚症状は良くなるならないことを説明している。

全身疾患と湿疹、皮膚炎の関連は強く、糖尿病、肝臓病、腎臓病は「皮膚にかゆみを生じる」三大疾患である。同じ治療をしているにもかかわらず皮膚の症状が悪化した時は、必ずといっていいほどこれら基礎疾患が悪化している。私は、これらの病気を合併している皮膚病の患者さんには、原疾患を治せないのと同様、

いづれにしても、皮膚病を「治す」とは一見易しいようで実は大変難しいこととです。